

作物名：りんご

病害虫名：黒星病（病原： *Venturia inaequalis* ）



葉の病徴



果実の病徴

1 被害の特徴と診断のポイント

- ・葉及び果実に発生する。多発時には新梢に黒色類円形の病斑を生じる。
- ・葉では、落花後7～10日後から、その表面あるいは裏面に淡黄色の小斑点を形成する。やがて拡大するにしたがい病斑周縁部が不明瞭な、黒色すす状またはビロード状の病斑となる。病斑は菌が附着した側にのみ生じ、反対側の面まで伸展することはない。激発すると早期落葉する。
- ・果実では、はじめがく片に発生し、葉と同様に黒色すす状またはビロード状の病斑を形成する。幼果では、数 mm の黒色小斑点が生じ、拡大するとその部分に小さな亀裂が生じ、果実肥大に伴って裂果や奇形果となる。また、8月以降の肥大後期に感染した場合は、収穫期までに発病せず、貯蔵中に発病し、黒色の円形病斑を生じる。

2 伝染源及び伝染方法

- ・第一次伝染源は、落葉した被害葉の組織中に形成される偽子の子のう胞子と枝の芽のりん片組織上に形成される分生子で、後者の場合は発芽時に感染するため発病時期も早い。
- ・子のう胞子は降雨によって子のう殻から飛散、感染し、発病葉上の病斑には黒色すす状の分生子が形成される。その後、分生子は降雨により葉、果実へ二次伝染を繰り返す。

3 発病・伝染好適条件

- ・本菌は糸状菌の一種で子のう菌類に属し、比較的低温を好み生育適温は 20℃で、発病適温は 15～20℃である。本病の潜伏期間は8～17日である。
- ・第一次伝染源となる子のう胞子の飛散時期は、通常、開花期前後が最も多く、この時期に降雨が多いと発生が多くなる。ただし、開花期以降も7月頃まで気温が低く、降雨が多い場合は発生が多くなる。高温乾燥となる夏季は停滞するが、秋季に気温が低下し、降雨が続くと再び発生が多くなる。

4 防除方法

- ・第一次感染時期の4月下旬～6月上旬に EBI 剤（DMI 剤）を散布すると有効である。特に開花期前後は薬剤の散布間隔が開きすぎないように注意する。
- ・二次伝染は秋季まで続くので、9月上旬まで斑点落葉病などと同時に定期的な防除を行う。
- ・被害葉や果実は第二次伝染源となるので、ほ場外に持ち出し適切に処分する。

5 出典

- (1) 参考文献：日本植物病害大辞典（全国農村教育協会）
ひと目でわかる果樹の病害虫第三巻（改訂版）（日本植物防疫協会）
農業総覧原色病害虫診断防除編第5巻（農文協）
- (2) 写真：宮城県病害虫防除所撮影